

編集後記

今年の夏は全国的に酷暑にみまわれ、38°Cを記録したところもあったと報じております。そして、ささやかな夏休みもまたたく間に終り、秋の学会準備にあわてふためいているのは筆者ばかりではないと存じます。

さて、本号の特集は「脳卒中片麻痺のリハビリテーション」ですが、今回は見方をかえて up-to-date のテーマをとりあげました。

牧下氏・他による Emission CT と今村氏・他のX線CTは、ともに脳損傷による機能障害を予測するうえでの有効性を論じております。両者のそれぞれの特徴は興味あるもので、ことに Emission CT による超早期のCVAに対する診断やADLの予後判定の可能性などは、リハビリテーション医の基礎知識として必要となるものです。

間嶋氏・他の片麻痺患者の体力の測定法は他の障害者の体力測定にも広く応用されるものです。一方、脳卒中患者の高次脳機能障害の面で、竹内氏・他は「非言語能力」に関する10年来の研究の概要を解説しておられます。

“研究と報告”では、窪田氏・他が「片麻痺患者の歩行能力の評価」という新しい知見をだされ、また、くしくも脳卒中の特集号に掲載され、本号をより興味あるものにして下さいました。

ひきつづいての“講座”は、浅山氏が脊損患者の自律神経障害について、また、中村氏が難聴児の言語発達について論じて下さり、いずれも講座にふさわしい読みごたえのあるものです。

日本リハビリテーション医学会も20歳を越えてようやく成人となった感じがしますが、まだ幾多の問題をかかえています。田辺氏は“巻頭言”のなかで、御専門の整形外科の立場から、わが国でのリハビリテーションの生い立ちとその将来感をのべておられますが、非常に意味の深いものです。リハビリテーション医学が専門分野として、その独立性を示すためには、障害学のなかでより科学的な診断と治療法の体系づけが必要とされます。ことに最近のリハビリテーション医療のなかでとり残されていくおそれのあるのが脳性麻痺児に関するもののようです。この分野でのよりアカデミックなアプローチに多くのリハビリテーション医療関係者がとりこんでいただきたいと願っているのは筆者のみではないでしょう。

最後になりましたが、赤津氏が故中村裕氏の追悼文をおよせ下さいました。中村氏は“太陽の家”など、社会福祉の面でも多くの業績をのこされました。御冥福をお祈り申し上げます。(千野 直一)

次号予告(第12巻 第10号)

特集 心理的アプローチ

リハビリテーションにおける心理的

アプローチ……………国立身障リハセンター 永井昌夫

「意欲に欠ける」患者へのアプローチ……………慶大 本田哲三・他

脳傷害と情緒障害：大脳半球機能分化と

情緒統御をめぐって……………京都府立洛東病院 佐藤能史

<座談会> リハビリテーションにおける心理的アプ

プローチ……………司会：上田 敏、奥川幸子・小西紀一・蜂須賀研二・横田 碧

巻頭言 予防心臓病学とリハビリテ

ーション……………ライフプランニングセンター 道場 信孝

研究と報告 頸髄損傷者への車椅子処方……………国療箱根病院 里宇明元・他

講座 合併症の障害学 4：脊髄損傷における合併症 (3)

尿路系の合併症……………神奈川リハセンター 石堂 哲郎

言語障害の評価 4：失語症の評価……………七沢病院言語科 竹内 愛子

一頁講座 人工関節 10：多関節置換……………神戸大・整形外科 広畑 和志

印象記 第21回日本リハビリテーション医学会総会に

出席して……………国療中部病院 祖父江 逸郎

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
茨 島 秀 男
加 倉 井 周 一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
齊 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長 谷 川 恒 雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)